

資料：

桜圃寺内文庫開庫100周年記念シンポジウム 「桜圃寺内文庫と山口県立大学」 パネルディスカッション

【総合司会 安光裕子】

ただいまより、「桜圃寺内文庫と山口県立大学」と題し、パネルディスカッションを始めます。

コーディネーターとパネラーのご紹介をいたします。

コーディネーターの伊藤幸司先生は、九州大学大学院比較社会文化研究院の教授でいらっしゃいます。平成15年（2003）4月から同26年（2014）3月までの11年間、本学で日本史を担当されました。次はパネラーの福田百合子先生です。

本学の名誉教授でご専門は中世文学です。引き続きまして國守進先生です。國守先生も本学名誉教授でいらっしゃいまして、ご専門は日本史です。最後に、熊本守雄先生です。熊本先生も本学名誉教授で、



ご専門は中古文学です。

それではまず福田百合子先生による「寺内文庫と私」です。よろしくお願いたします。

【福田】

みなさんこんにちは。ちょっとマスクを外して顔だけお見せしますね。さっきマスクをした人、誰か卒業生、分からなくて「あなた誰？」とか言って失礼しましたのでちょっとだけマスクを外します。で、あとはかけますね。福田百合子です。



11月3日、今日は明治節と言っておりました、文化の日じゃなくて、「今日のよき日は御光のさし出たまいしよき日なり（歌）」明治天皇がお生まれになった日なのです。と、寺内正毅が同じ日が命日



だっていうのはすごいですね。昔は地久節という皇后様の日も旗日だったのですよ。天長地久、天地長久。天長節と地久節という紅白がもらえる、おまんじゅうか餅がもらえる旗日だったのです。ということで、今日「寺内文庫と私」という題で、10分間で話せと言われるのですが、その前に彼女がアイコンタクトを送ると言うのですけれども、私は10分は足りない、3分の1くらいは熊本先生にあげると言っておりまして、熊本先生は10分じゃ話せんぞとおっしゃっておいまして、私はなるべく短く話したいと思います。

私は昭和16年、すなわちこの大学が女専という始まりの時に山口高等女学校、今の白石小学校がある所が女学校だったのです。中央高校の前身です。中央高校は今宮島町に移っていますがその前は今のNHKの所にありましたね。そしてさらにその前が今の白石小学校、県庁の前……に私共は昭和16年、太平洋戦争が始まる年に入学いたしました。中谷先生という校長先生だったのですが途中からですね、近藤篤という本学の初代学長になられた方が、女学校と兼務で校長先生になられたのを覚えております。以後ですね、香川静爾、田中巖と全部、現在の加登田（恵子）先生まで言えるのですがそれもそれはちょっとカットいたしまして。全部に関わっているから、24代目ですか、そんな歴史上の人物なのです。寺内文庫はその頃昭和16年(1941)にはこの宮野、桜島という土地の、地域の文庫でした。ですから斜め前に大枝のおじさんという用務員さんがおられましてその奥さんの大枝のお婆さんという方が文庫におられました。それからもう1人は、竹中さんという未亡人の方、この方は山口県の菜香亭と並ぶような大きい料亭、今の井筒屋の隣がマンションに建て替わる所がありますけれどもあの角っこの前は明治堂でした。その前は佐田楼という有名な料亭だったのです。そこのお嬢さんなのですけれども未亡人になられまして、大枝のお婆さんと佐田さん、すなわち竹中さんが2人でこの寺内文庫の鍵をお持ちになっていました。そして要望によって中が開けて見られるという形でした。そして、なにしろ太平洋戦争が始まった年ですから、東京から疎開の有名な先生が全部山口高女でも教えられました。校庭に立っている要会館という同窓会館で発足の女専でした。昔は山口高女が5年制で、高等科が2年、専修科というのが1年、すなわち他の女学校は全部4年制でしたから、4年の人はもう1年、女学校を出て専門学校に行かなきゃいけないということで、この高等科と専修科が合体して山口女専ができるという形になったのです。それで要会館にその方達は入学されたと思います。まだ校舎が宮野になかった時ですね。そして今日卒業生の方がおられると思いますけれど

も、桜園寺内文庫と言うように同窓会の名前が桜園会となったのは、この宮野桜島の桜と「ほ」はたんぼの圃だから「おうほ」じゃないかという人がありますけど、「おうほ」と濁らないのです。山口県は「ザビエル」と言わない、「サビエル」。「ふぐ」と言わない、「ふく」、という清音志向があるので、たぶん。だから「ふぐ」じゃありませんよ、東京の人は「ふぐ」と鼻濁音で言いますけど。あの食べるおいしいふくは「ふぐ」でなく「ふく」です。それから「おうほ」会、「おうほ」寺内文庫。「おうほ」ではない。「おうほ」寺内。で、同窓会が桜園会になったのも宮野桜島という地名と、やっぱり寺内さんにも関係があるのではないかという風に思います。そして、戦争がだんだん激しくなりますので、パールハーバー、真珠湾攻撃とか始まるものですから、東京から疎開の先生方が、有名な先生方がたくさんいらっしゃいました。たとえば、平家物語で有名な永積安明とかですね、荒木田宗武という俳諧の文学者の子孫の荒木田楠千代とかですね。それから芭蕉の研究で有名な井本農一とかですね、万葉集の鴻巣盛広の孫の隼雄とかですね。みんな女学校と女専の先生でした。で、その方が寺内文庫というのがあるけれどもどう行くのだろうかと地元の者に聞かれるわけですね。山口線に乗って宮野駅で降りて、まっすぐぶつかると、そこにコンクリート建ての、ハイカラな西洋風な建物があります。それが寺内文庫です。という風に、地元の学生としてはお教えしたような記憶があります。寺内文庫の中身はほとんどが漢字文化ですよ。難しい本ばかりとの印象でした。

文庫には大枝のお婆さんと、用務員の方のお婆さんですね、寺内文庫の斜め前です、今の角っこ、駅から来たところの角っこの用務員さんご夫婦が管理をしておられたと思います。そして東京からの有名な、特に漢字の文学に興味がおありと、そういう先生方、漢文の先生を始め、あそこに大きい石碑が立っているのは藤田（鴻輔）という私たちは漢学者だと思っていたのですが寺内元帥の副官だった人の顕彰碑だそうなのですが、そういう関わり方をして、寺内文庫というのは早くからネーミングとしては知っておりました。使うようになるのは私が卒業したのち、助手時代になってからのことです。それはまだ朝鮮館がわずかに形を留めていて、それがなくなってそして朝鮮館の跡を弔うためかのように亭（ちん）のような小型の建物が立って、それを使ったりしたという思い出です。以上です。

【安光】

福田先生どうもありがとうございました。それでは引き続きまして、國守進先生による「寺内文庫調

査事始め」です。よろしくお願いいたします。

【國守】

さて、私の寺内文庫調査の事始めについてお話しします。

初めて私が文庫の内容を見て気づいたのは、いわゆる通俗図書館とはまったく異なり、私の専門分野の歴史、なかならず県関係資料が充実していること、朝鮮・中国関係資料が大きい比重を占めていることなどでした。また、文学など、非常に多彩な内容を持っているので、とにかく調査の必要を感じまして、熊本先生とタッグを組んで、文部省に科研費の申請を行い、無事許可されました。寺内文庫の重要性が許可の根拠になったと思っています。

最初に着手したのは目録の作成で、当時、本学入学一年生の2人に目録カード作りを依頼しました。それが今あそこで司会をしている安光裕子さんと小松恵子さんです。次いで、調査の分野について、熊本先生にはおもに文学関係、私は歴史、朝鮮関係をやろうということで始めました。寺内文庫の図書の調査はすでにある程度なされていたのですが、朝鮮関係の文書や詩文などはなされていませんでした。

さらに重視したことは、寺内氏が文庫を設けるに至る経緯でした。これの着手にあたっては、とにかく寺内家所蔵資料を見る必要があるわけで、寺内家を訪問することとしました。当時、寺内寿一氏夫人順子さんがご健在で、神奈川県大磯の寺内家を訪問しました（昭和50年（1975）10月）。念のため夫人に大磯駅からの道順をお尋ねしましたら、「寺内」とおっしゃればわかります」とのこと、尤もと納得した次第でした。

夫人は文庫の顕彰には非常に積極的で、大事な資料は見せていただきました。これは科研費研究成果の報告書でもある『桜圃寺内文庫の研究』（昭和51（1976））のなかに収めています。同書のなかには「和漢書について」（熊本）「朝鮮本・李朝文書について」（國守）があります。私が朝鮮関係の資料調査でいちばん困ったのは朝鮮の古文書をまったく知らなかったことですね。そこでまず、朝鮮の李朝の政治組織・官職の制度から調べなければならぬわけで、これは大変苦勞しました。

韓国の図書館などにも照会しましたが、なかなか欲しい資料は出ないものですね。その後の新たな寺内文庫研究成果は伊藤先生の『桜圃寺内文庫の研究』（2013年、勉誠出版）でカバーされています。

李朝の文書で私が興味を感じたのは「明文」（証文）のなかで、たとえば田畑などの売買の証文（放売明文）に本人証明のために手のひらの形を文書に書き込むわけですね。こうした李朝文書のことがら



は私の古文書の講義のなかで紹介しました。朝鮮関係の資料のその後についてはのちほど熊本先生が説明されます。

寺内文庫は大正11年（1922）寿一氏が正毅氏の遺志をうけて建設、2月5日に発足するわけですが、このとき、山県有朋危篤のニュースが広がり、誤報もあって混乱しました。結局2月1日逝去するわけですが、そのときでも山口県では回復祈念の遥拜式が計画されることもありました。

当主の寿一氏は帰京せざるを得なくなりまして、5日の開庫式は中止されましたが、開庫は予定通り行われ、閲覧者はかなりあったようです。寺内文庫の運営委員は県の学務兵事課長・県図書館長・宮野村長・國司精造（陸軍少将）、これは児玉源太郎の後輩。こういった人達が運営しているわけですね。一般の図書館とは性格がことなることがうかがわれますね。

最後に昭和16年（1941）2月、寺内正毅元帥追憶の記念碑が建立されました。これは立派なもので、元帥の副官であった陸軍中将藤井鴻輔の作文になるものです。

以上で私の報告を終わります。

【安光】

國守先生ありがとうございました。それでは引き続き、熊本守雄先生による「寺内文庫旧蔵『韓国関係資料』について」です。よろしくお願いいたします。

【熊本】

熊本守雄でございます。時間が10分だということは8月の時点から安光先生から今日を含めて10回くらい聞かされております。こういうことを話す間にも、時間がたつということで、今日はお手元に届いております予稿集の中に韓国の慶南大学校に韓国関係の資料98点、135冊を寄贈した経緯につきましては、その「寄贈の顛末」においてまとめておりますから、後でお目通しいただければと思っております。それで、この時間は2点ばかりに絞ってお話をしようと思います。



今問題の寺内文庫は、ご存知のように私設図書館として発足したものです。その際大きな影響を受けたのは、親戚関係にありました徳山（今の周南市）の児玉文庫です。これは、日露戦争などで活躍しました児玉源太郎の文庫なのですが、寺内家とは後嗣である（児玉）秀雄さんのところに、正毅さんの（娘の）沢子さんが嫁ぐということがあり、児玉文庫の評議員を正毅さんが務めていました。そういう

関係で、大きな刺激を受けて、自分も私設図書館を設けるといふ決意を正毅さんはされたのですが、同時に、その頃山口県は大変図書館活動の盛んな県であったのです。信濃教育会で有名な長野県を抜いて、防長教育会は全国を大きくリードするような形で図書館、教育に大変熱を入れております。そういうこともあって大正の頃から昭和の初期にかけては、この山口県では小さな町や村の隅々まで図書館が設けられていました。たとえば、ここの宮野にも宮野図書館というものがあまして、大学の近くにある木梨男爵家から、江戸時代の終わりから明治の初めにかけて出版された木活字本、（慶長の頃の高活字本とは違うのですが）、そういうものも寄贈されているというようなことで、郷土を挙げて図書館活動が盛んでした。貧しかった日本は、明治以降、「教育は未来への投資である」、こういう思いが大変強かったのです。ですから、先ほど言いましたように、小さな公立の、村立、町立の図書館だけでなく、私設の図書館が県下にたくさんありました。たとえば難波大助の生家も、そういう私設図書館を持っています。他県からは、大きく抜き出た、図書館活動の盛んな県であったわけです。

そういうものを背景にして設立されることになるのですが、そのなかでも、特に正毅さんには、郷土の子弟には「歴史を勉強してほしい」と、こういう思いが強くありまして、そして中国、朝鮮、日本の歴史を中心に集書しています。たとえば韓国の場合でも、『東国通鑑』という、これは銅活字本でして、この度、問題にしている慶南大学校への寄贈対象にはならなかったのですが、非常に印刷物としても優れたものです。これは、ちょっと話がずれますが、日本には室町時代、伴天連が日本にやってきて布教する時に、天草の地を中心に天草版の『平家物語』とか『伊曾保物語』、あるいは『日葡辞書』だとか『日本大文典』などと、日本語をポルトガル語流の綴りで書いた、そういう資料を活字印刷したのですが、伴天連が国外へ追放されると印刷機なんかもマカオに持ち出します。その後、日本では木活字本、いわゆる高活字版、慶長から寛永の頃にはそういう木活字版の本が出版されました。この木活字はですね、同じ活字を何度も使えていいのですが、増し刷りをしようとするときには、またあらためて組み直しなないといけない。そういうことから、寛永頃以後は版木刷りのものが広がるわけですが、朝鮮においては長く銅活字本で綺麗な印刷で出版されます。その銅活字本が何点も寺内文庫のなかにはあるわけです。

次に、あまり注目されていませんが、私なんかは、正毅さんは若い頃司馬遷の編纂の歴史書である『史記』なんかを読んで、特にそのなかでも、漢の高祖

を支えた相国いわゆる大臣として漢王朝を支えた蕭何の影響を強く受けたのじゃないかと前から思っております。それは漢の高祖、この人は沛公とか劉邦ともいわれた人物ですが、その部下として漢の王朝を支えた蕭何という人物の手柄はですね、たとえば競争相手の楚の項羽なんかは、秦が滅びた時に秦朝の財宝なんか目をつけるわけです。ところが、蕭何は秦の王朝の図書（づしょ）ですね、地図だとか古文書だとかあるいは戸籍のようなものをきちんと押さえるわけです。それを元にして、新しい漢王朝の礎を築こうということをやります。それはですね、朝鮮総督として総督府に勤めることになって、いろんなことを総督府に命じて調査をさせます。目立たないようなものも非常に大事にしたわけです。つまり民意を捉えて統治するためには、そういう昔で言えば戸籍だとか地図のようなもの、どの地方にどういう産物がとれるか、どういう風俗があるか、そういうものも確認した上で統治していこうという、そういう姿勢だったわけですね。私なんかはそういう点では史記の『高祖本紀』に見える、あるいは蕭何伝にみられる蕭何相国の事績、こういうようなものからの影響を強く受けていると私は思います。とにかく歴史に学ぶべきだというような形で、寺内文庫の中心的な蔵書は歴史関係で、史書に非常に力を入れているというように思っております。若者たちに歴史をもっと勉強してほしい、こういう思いが非常に強かったらうと思います。

そしてそういう形で正毅さんが大事に蒐集したものが、たまたま私が文学部長の頃なのですが、その本を韓国の大学に寄贈するということになります。その経緯については、先ほども言いましたように、今日配布された予稿集にまとめてありますからご覧いただきたいのですが、その時に寄贈する98点で、冊数を言いますと135冊のものを、マイクロフィルムに撮ってこの大学に保存する。ネガフィルムとポジフィルムで残そうということで、京都の光楽堂に頼んで2台の撮影機械を持ち込んでもらって撮影してもらいます。そういう営みをして残したのですが、この度の引越し騒ぎで、このマイクロフィルムが今、その所在がわからない。そして全部で3,859コマあったのですが、それを時間のとれた合間に、A3の大きさにコピーしたのも元の図書館の寺内文庫棚に置いていたのですが、この度の引越し騒ぎでその所在もわからん。見つければ今日の会場で展示して見てもらって、こういうものかと僥んでもらいたいと思ったのですが、それはどうも今日の時点ではできない¹⁾。無論そのマイクロフィルムを利用しようとするれば、マイクロフィルムのリーダープリンタも必要なのですが、重くてまだ古いキャンパスからこちらの方には移動していない。今は電子化を図っ

て、そういうようなマイクロフィルムのリーダープリンタを使わなくても資料を伝える利用する方法がありますが、手間がかかって経費を計上するのも大変です。とにかくあの時点で私のできる最大の努力をしました。県の理解も得てマイクロフィルム化することに尽力したのです。初めは東京の高橋写真から呼ぼうとしたのですが、やはり車で撮影資材を運ぶとなる時に東京から来るよりも京都から来た方がいいだろうということで、結果的には京都の光楽堂から撮影に来てもらったのですけれども、そういう営みをして大学に資料を伝えようとしていたのですがなかなか伝わっていない。それにもうひとつはですね。國守先生などと一緒に30年前に『山口女子大五十年史』（山口女子大、1992年）を編んだ時に、資料が大学に少なくて困ったのです。そういうことかつての文学部棟、後の国際文化学部棟の3階に、その時収集した資料に、その後私に関わったことも含めて、写真とか資料をスチールのロッカーに残したのですが、それがこの引越し騒ぎにどうなったのだろうか。それに加えて、図書館に本来置くべきものだったのですが、場所がないものだから、文学部棟3階にマイクロフィルム室を設けてマイクロフィルムをたくさん購入してそこに置いていた。これらのマイクロフィルムは高額で県費としては対応できないので、文部省の国庫助成対応で買い揃えたものですが、そういうものもマイクロフィルムリーダープリンタがないと読めないわけです。それをいちいちまた電子化するよりも、そういう既存のマイクロフィルムリーダープリンタで資料を見るということが最も現実的だと思うのですが、残念ながら、そういうことができない状況にあります。私にとっては精一杯がんばったことがいろいろとうまく生きていない。伝存していない。愚痴をこぼすようですが、公立大学の予算の問題もあるのですが、事務職員の方の勤務年数が、どうしても国立や私立と違って短く、3年とか5年とかくらい、早い場合は1年で転勤なされる。新しい血が入るから非常に結構なのですが、同時にですね、伝達がうまくなされない。その辺が非常にもどかしいのです。なんとかしてそれを補う組織を作っていただく、作っただけではだめなので、組織が機能するという形で資料を伝えていくということもお願いしたい、と今強く思います。別に遺言じゃないのですが、そういう思いを強くしております。それから、時間がすでにオーバーしましたが、資料や図書の保存についても言っておきたい。かつての図書館においては書庫を広く取れなかった。ゆくゆくは書庫を増設しようとしたのですが、消防法の関係で前の図書館には増築できなかったわけです。ですから各先生方の研究室に図書を分置して置かせてもらおうと。だから学生さんは

非常に利用しにくかったのです。けれども、それしか方法はなかった。ところが私が17年前になりますかね、この大学を定年で辞める時に、図書館に本を返却しますと、もう書庫の棚に入らない。通路にしか入らない。ですから40年近くかけて研究費を使って購入した本が、すぐ廃棄処分になるということになりました。このような情けない、むなしいことはないわけですね。そういった点でやはり、電子図書の時代ではあると思いますが、書籍や資料というものをどのようにするか。もう当然おのずからですね書庫は限りがありますから、また今後同じような廃棄処分になることもあり得る。また、もう一つの問題、県立図書館であれば予算との関係がなくてたくさんの方が利用してくれる書籍、数字の上では、1冊の本を何十人の人が読んだとなると、経済効率も高く、歓迎されるでしょう。3万円も5万円もする高額な専門書は買えない。無理をして買っても1人か2人の利用者じゃないか、となる。ならば、少数の利用者しかいない本は購入しないことにしようとなる。そういうようなことを県立大学附属図書館の運営としてやってしまったら、大学の図書館の果たす役割が果たせるか、ということですね。今在籍の人は利用しなくても、次に入ってくる学生が研究のために利用するかもしれない。そういう図書の蓄積ということを考える上でも、大学の附属図書館の組織をしっかり機能させていただきたい。これは遺言のように言っておくのです。そんなことで、愚痴のようなものが最後になりましたが、心余って言葉足らずと『古今集』じゃありませんがそういう思いがしまして、時間もオーバーしてしまいました。以上で終わります。

【安光】

熊本先生どうもありがとうございました。しつこく何回も申し上げまして失礼いたしました。それではこれからはコーディネーターの伊藤幸司先生に進行をお願いいたします。

【伊藤】

それでは進行を引き取りたいと思います。名誉教授のお三方からは、溢れるお話をいただきました。10分でというお願いだったのが、最初から難しいリクエストだったのだと、今、拝聴して思いました。



寺内文庫は寺内正毅ゆかりの図書館ということですが、最初に渡辺先生の方から、一般的に知られている寺内に対するイメージについて、もうちょっと考え直した方がいいのではないかというお話がありました。たしかにその通りで、山口でこういうこと

を言うと怒られてしまうかもしれませんが、NHKの大河ドラマでも、昔は薩長史観のものが絶えず流れていたのですが、最近は反対側の立場から描かれたドラマも作られたりしており、非常に良い傾向だと個人的には思っています。寺内についても、どうも教科書だと平民宰相原敬と対照的にすごく悪者的に描かれたりしていますし、司馬遼太郎も寺内正毅は細かくて神経質だなどとネガティブで、見た目もどこか怖そうだということもあり、とにかくイメージが悪いのですが、やはり確かな資料から何が見えてくるのかというところから再検討していくのが非常に大事だなということ、渡辺先生のご報告を拝聴しながら思いました。先ほど熊本先生のお話にありましたように、山口では大正年間に教育熱が大変高かったと。未来への投資のために教育が必要だ、まさに今の日本にも必要なことではないかと思うわけですが、その雰囲気の中かで寺内文庫は建設されて、開庫するのが約100年前。厳密に言うと来年（2022年）の2月5日が100年目ということです。その後、日本がアジア太平洋戦争に負けて進駐軍がやって来た時、福田先生のお話の中かで焚書坑儒じゃないですけどもちょっと本を燃やしたというパフォーマンスの逸話があったのですが、その件をもう少し詳しくお願いできないでしょうか、福田先生は実際にご覧になったと思いますので、宜しく願います。

【福田】

ニュージーランドが進駐して参りまして、今の自衛隊の左手にあるところに事務局が置かれました。ニュージーランドの軍司令館が入って来ました。京都に侵攻したのが、8月15日が終戦なのでですけど9月16日、福田百合子の誕生日ですけど、9月16日に京都には進駐したと。これは露草の君という私のボーイフレンドが、露草が描いてあって9月16日京都進駐という掛け軸を私が見つけて掛けていたら、それが欲しいというのを断ったら、母が、人が欲しいと言うものはあげるものと言って勝手に送ったので今ないんですけど、そういう風に進駐してくるのは8月15日すぐじゃなくてここに来たのもちょっと遅かったと思うんですけども、すぐに戦時中の本は全部焼くようにと、だから寺内文庫も焼かなきゃいけない。大学が持っているのも全部焼けということだったので、それは中国の例に倣ってそんな事をするには忍びないというので新聞紙か何かをちょっと燃やして報告だけしましたら、呑気なものでオッケーとか言われてですね助かったという思い出があります。

【伊藤】

本当にその時に燃やされなくてよかったです。文庫の資料というのは、こういう危うい危機を切り抜

けて現在に伝わっているということが分かります。その文庫の建物の隣に、文庫より早く建てられたのが朝鮮館という建物でした。最近、渡辺先生が朝鮮館の写真を発見されて、建物のイメージがつくようになったのはありがたいことです。先ほど倉田先生も朝鮮館の再現をCGで出されています。この朝鮮館を実際見たことがあるのは、ここでは福田先生だけだと思いますが、実際どのような感じだったのでしょうか。

【福田】

非常に綺麗に朝鮮館というのはグリーン屋根で下が朱色だったと思うんですね。あをによし奈良じゃありませんけれども、そうだったと思うんですけども私が見た範囲では真っ黒です。とにかく正面も瓦も黒かったですし、というのは当時空襲を恐れて白壁の土蔵でも迷彩にしたという時代ですから、多分後で黒く塗ったのだと思います。そして下はお寺の食堂というところがたたきになっていますね、土を踏み固めた。石とか床張りとかじゃなくてそういうたたきでした。そこに立派な木製のテーブルと椅子があって、私共はそこで新聞部員の編集とか俳句会とか、読書会にはちょっと光が少なかったと思いますが、そういう風な集まりをして使いました。

【伊藤】

残念ながらこの朝鮮館の建物は、その後メンテナンスが上手くいかなかったようで、昭和20年代中にはなくなってしまい、その残骸と言うか、瓦が断片的に残っています。一方、寺内文庫の建物は、現在も残っています。そして、この寺内文庫には、どうも偉い先生がたくさん来館されたようですね。

【福田】

みなさん都会から疎開してみえていたものですから、そういう方は寺内文庫の存在をご承知でした。それで漢字文化にご関心のある方はみんな見ることが望まれて、どこにあるのか、いつ開けるのかみたいなお話があったんですけども、先ほど國守先生からお話のあった、雑談ですけど、チェジュ島ですね、濟州島と言いましたけど、その漢拏山（ハ



写真1 旧桜園寺内文庫（1973年）

ンラサン)に登る時に行ったのですが、韓国の文書は全部漢字でしたけども、今やハングルという時代になって、文字の表記化と言うのでしょうか、意味、訓読と音読とあれば全部音読になっちゃう文化なのですよね。そういう風な、哲学の変化と言うのでしょうか、そういうことが見られるのが寺内文庫にあると思います。

【伊藤】

なるほど、ありがとうございます。わりと中央から疎開して来た先生なんか、寺内文庫の資料を見たいと思われるほど知られていたのですね。それくらい貴重な資料が文庫の中に入っていたということになります。具体的にその資料の特徴については、國守先生の方から補足をお願いできればと思うのですが。

【國守】

古典の写本などに貴重な典籍のあることについては『桜園寺内文庫の研究』のなかでふれられています。気づいたことといえば、全体的に見て寄贈図書が多いことでしょうか。当然、そのなかには雑多なものもあるわけですが、私が最も気になったのは上原元帥の1,000冊にも達する書冊が寄贈されていることですね。上原勇作という人は薩摩出身の陸軍軍人で、長州閥と対立した薩摩閥の代表的な人物です。そういう反長州閥の彼の書冊の多くがどういう事情で寺内文庫に寄贈されているのか、大変興味があります。西園寺内閣の段階ではまだ対立していなかった、とすればその頃寄贈されたのか、あるいはまた、この段階で寄贈される事情がありえたのか、なお調査したいところです。

ところで、寺内・上原とも元帥に列せられています。元帥は軍人の頂点に位置し、元帥府を構成する存在ですが、明治以降、元帥になったのはわずか30名だけなのです。明治30年(1897)、山県有朋が元帥になったのが最初で、みなさんご存知の山本五十六(連合艦隊司令長官)、この方は戦死後元帥になっています。寺内氏のように親子が元帥というのは他に例がありません。寺内家が武門の名家とされる所以でしょうか。

のちほど図書館でご覧になれるかと思いますが、寺内元帥追憶の顕彰碑が建立されています。昭和16年(1941)2月のことです。この年の12月に太平洋戦争が始まるわけですね。寺内寿一氏は11月、南方方面の総司令官に任命されるのです。そういう時期だからこそ、この顕彰碑は喧伝されたのでしょう。

【伊藤】

はい、ありがとうございます。國守先生にご指摘いただいた顕彰碑は、今でもすごく大きい石碑として立っています。かつて、昭和54年(1979)くらいに國守先生が当時の女子大生を動員して取られた拓本

が今の図書館の1階に展示してあります。ぜひ一目ご覧になってお帰りいただければと思っています。こうした貴重な資料が入った寺内文庫ですが、その後これまでみなさんが使われていた旧図書館が昭和52年(1977)に建つので、資料の引越しがなされました。その引越しの少し前に、國守先生や他の先生方が所蔵資料のカードを取られています。その時、動員された1人がかつて女子大生だった安光先生ということです。以前、私は安光先生に、それらのカードのデータの取り方が甘い…と言ったようですが、どうもすみませんでした。失礼なことを言ってしまうて。

それで、そちらの方に文庫の資料が移った後、しばらくして起こるのが、韓国の慶南大学校に寺内文庫資料の一部で、朝鮮半島ゆかりのものを寄贈するという、事件と言うのでしょうか、それが発生するわけです。その経緯については、私も本のなかで書いたことがありますし、本日の予稿集で熊本先生も詳しく書かれています。これについてひとつだけ注意していただきたいのは、韓国側は、これを「返還」だという風に言っているわけですが、あくまで交わされた協定によれば、日本側が学術交流の一環として韓国側に寺内文庫資料の一部を「寄贈」したということになっています。ですから、我々が安易に寺内文庫資料を韓国に「返還」したなどと言うことは、先人たちの思いなどを裏切ることになりますので、その辺りを気をつけて使っていただければと、個人的には思っています。韓国の慶南大学校には、大変立派な博物館が建っており、その中に文庫資料が入っています。資料保存の点ではいいのですが、そこでハングルで書かれている寺内文庫の資料のパネルでも、残念ながら「返還」されたという説明がなされています。お国の事情がありますから、向こうではそういう風に説明されているのですが、あくまでもあれは「寄贈」であったということ、我々は心に刻んでおいてほしいなという風に思います。

そうこうするうちに、もう終了予定の15時が来て



写真2 旧桜園寺内文庫内の様子 (1972年)

しまいましたので、もう終わらなきゃいけないのですが、奇しくもこのシンポジウムはある意味、この大学の創立80周年も兼ねているのではないかなと思います。寺内文庫の歴史は、この山口県立大学の歴史と、まさにかぶるわけです。福田先生はその生き証人といえます。ずっと大学のあゆみをご存知なのだと思うと、ある意味驚きです。昨今、大学の歴史、大学史の重要性というのがよく言われています。歴史というのは過ぎ去ったものではありませんが、過去の積み重ねの上に現在があるというのは間違いないわけです。ですから、今しか見ずに物事を判断するというのは、ある種の危険性があります。また、過去から現在に残された史資料というのは、これから将来へと伝えていく義務が我々にはあるわけです。ここ数年、記録を改竄したり捨てちゃったりとかいうような事件が国家レベルで起きていますが、非常に由々しき問題です。やはり、物事が常に検証できるように、そういう記録を残していくということは非常に重要ではないかと思っています。そういう意味では、かつて國守先生と熊本先生が大学の50年史を編纂されおり、数年前には75年史を作られたということなので、ぜひ山口県立大学としてはそういうところにもちゃんと目配りをして、やっていただければありがたいと思います。ちなみに、山口県立大学とおなじ女子専門学校をルーツとする福岡女子大学では、100年史を編纂するために、歴史学で学位を持った人を専門の嘱託で雇用して本格的にやっておられます。ところで、熊本先生は、大学のあゆみを写真で撮って整理されたようなものをお持ちだとお伺いしていますが、どうなのでしょう。

【熊本】

私的に撮影したものなのですが、まあ大学をまったく信用しないというのではないのですが、やっぱり同窓会の方が資料の伝達という面では継続性があるのではないかということで、同窓会の方に託そうと思っています。私的な写真ですが、この新しいキャンパスが山である状態からブルドーザーで切り拓いていく、そして古墳を発見して、中から遺物が出てくるなどと、その都度一応こまめに写真を撮っていますし、下の駐車場のところが中世の住居跡で井戸なんかも出てきましたし、いろんな土器なんかも出てくるような形で、一応その間のものも写真に収めておりますから、なんらかの形で資料が伝わっていけばという思いで、同窓会の方をお願いしようと思っている次第です。それに加えて、平成8年(1996)4月27日に韓国の慶南大学校において行われた山口女子大学と慶南大学校との学術交流に関する協定を締結した調印式のスナップ写真も同窓会に託そうと思っています。

それからちょっと話が逸れるのですが、この度の

寄贈の顛末のことを記した私の文章を見ていただくと分かると思うのですが、我々はあくまでも寄贈ということしていくのですが、「強奪したもの(の返還)だ」ということを韓国のマスコミは繰り返し言うのですね。そういうことで私は教育の重要性と同時に教育の怖さということも強く思いました。特に李承晩時代に一方的に李承晩ラインを設けて、日本の漁船がこの線を越えると拿捕されて抑留される。罰則金を払ってやっと釈放されるという事態が長く続きました。そのため漁業県である長崎県とか、山口県は大変苦勞するわけです。そして山口県と慶尚南道とが姉妹提携するのもそういう漁業問題から発生しているのですね。それからこの寺内文庫の一部が韓国に寄贈されるという契機になったのも、当時の日韓議員連盟の会長の竹下登さんの存在なのです。竹島問題を抱える島根県出身の元首相です。そんな形でかなり政治的に利用されたというのは否めないという感じを持っております。特に李承晩大統領による反日教育ということの影響は大きいですね。その結果今も韓国の人たちの日本に対する意識というのは非常に厳しい。たしかに朝鮮を併合していた、当然そのことを抜きにしては語れないのですが、寺内さんの場合は、私はいろいろ調べてみたのですが、今まで言われているもの以外にもですね、寺内文庫の本の購入を証する資料がいろいろあります。寄贈を受けたことについては先ほど國守先生がおっしゃいましたが、『公車類輯』・『退溪先生文集』・『慕夏堂文集』・『鳳棲齋集』、こういうものには、購入を証する資料とか、寄贈を受けた図書であることを示す記述がみられる。あるいは、京城帝国大学の法文学部の赤い罫紙に「計33冊、右代金80円也」というようなことを書いた挿紙があり、小田省吾教授が寺内家の依頼によって購入斡旋をしたというようなことも判明するので、決して強奪したわけではないのです。公の朝鮮の蔵書なんか一切ないのです。今はソウル大学にそういうかつての朝鮮王室の史料なんかそのまま残っています。ですから強奪なんてまったく言いがかりのように、私なんかは思っているわけです。だけれども、そういう反日教育を受けた人たちにとっては、特にマスコミは強奪としか表現しないのです。だからこちらが寄贈をやめましょうと言った時には、向こうの韓日議員連盟の池鉄敏事務総長なんかは周章狼狽、奔走して、マスコミにあたって正確な報道をしてくれと言ったのですが、訂正は一切してくれなくて、山口女子大学側の主張によると寺内家の私財によって購入したものだと言っていると、二、三行の報道でしかないのです。そうした二、三行の報道もなかなか韓国のその当時の状況ではむづかしいことであったということで、当時の高山(治)学長も「それでは、そういう

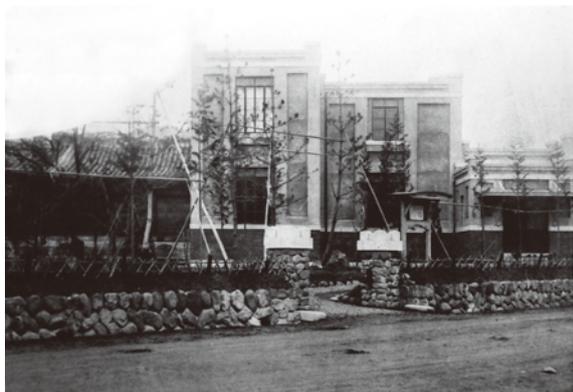


写真3 旧桜園寺内文庫（1923年）

先方の努力をよしということにして、続けることにしましょうか」ということになりました。その時はもう寄贈する図書について下松の業者にきれいに修復してもらって、マイクロフィルムにも撮って、1セット（ネガフィルムとポジフィルム）は慶南大学校に贈ろうとそれも準備していた時でした。韓国のマスコミの報道が、強奪されたものが返還されることになったという具合に、「返還」といつまでも表現するわけですね。だから私達は学術協定を結ぶ時も、学術交流のために寄贈するのだと協定書に明記したわけです。政治家は、韓国の国会議員なんかは返還ではないと口では言うのです。だけれど、先ほどのお話にありましたように、慶南大学校の展示室なんかにおいてはやはり自国民を意識して「返還」と、返還させたのだとそういう感じである訳です。また、学術交流のために、お互いに学術の資料を交換しましょうということで、協定したのですが、向こうからは一冊も我々が要望した文献について寄贈もないという一方通行でおわっている。それが現実であり、やはり教育の怖さでもあろうと思うのですね。

【伊藤】

はい、ありがとうございます。紆余曲折を経て、双方の主張があるということですね。そういうなかで生まれてきているのが慶南大学校との交流であり、このなかにはそちらの大学に行かれた方もいるかも知れませんが、こうした歴史が前提としてあるのだということをお忘れなくいただきたいと思います。時間が過ぎてしまったのでそろそろ締めないといけないのですが、いずれにしても寺内文庫というのは元々宮野駅前のビルディングから、これまで使っていた旧図書館に1回移り、そしてこの度この新しくなった図書館に移ってきたということで、2回の引越しを経ているわけですね。ここにきて、先ほどの倉田先生のお話にありましたように、インターネット上で、寺内文庫の資料を公開していく体制が整い

つつあるというのを聞いて、私としては感無量です。私が県大から九州大学に移る直前、2014年の2月に開催した寺内文庫シンポジウムで、そういうのもできればいいなと私は言っていました。その後、県大に来ていただいた渡辺先生と倉田先生にご尽力いただいた結果、Web版寺内文庫のスタートができて非常にありがたいと思っております。いずれにしても、地域の知の拠点として図書館というのはあるわけです。寺内文庫というのは教育図書館的な役割があり、貴重な資料を保存して未来へ伝えていこうという意志のもと存在していました。その意志を引き継いでいくのが、この山口県立大学であり、新しい図書館ではなかろうかという風に思っています。今まで100年経っています。100年の歴史というのは結構重いのではないかと思います。100年の歴史の重みを作り出すには100年かかるわけです。今まで100年積み重ねてきたわけですから、これからさらに100年というのを期待していきたいなと思っております。先ほど冒頭で学長が「文化を大切にする思い」ということをおっしゃいましたので、きっと大学では寺内文庫を大事にもらえるものだと、私は期待しています。ぜひよろしく願います。それでは10分超過しましたがお返します。

【安光】

それではちょっとお時間が過ぎましたけれども、伊藤先生コーディネーターをお務めいただきありがとうございました。それからパネラーの福田先生、國守先生、熊本先生どうもありがとうございました。それではみなさま今一度拍手をお願いいたします。

それではここで最後に主催者として閉会のご挨拶をさせていただきます。私事ではございますけれども開庫100周年にあたって、文庫との関わりというのを振り返ってみますと、先ほどから出ております、本学に入学した年の夏休みに、文庫資料の研究調査に関わるようになったことが文庫資料との最初の出会いです。多くの資料に囲まれて目録作成のためにカード作りのお手伝いをさせていただいたということです。ただ間違いが多かったということはちょっとショックを受けておりますが、このような地道な作業が研究という作品を作り上げる土台となっていることに気づきました。また先ほどからあるように文庫は本学の図書館でもあったということで、重厚な雰囲気の中で読書をしたり調べ物をしたりしたことを今でも鮮明に覚えております。文庫は私の研究生生活をスタートさせる最初の第一歩を踏み出す場であったと言えます。私にとって今年度は退職を迎え、研究生生活の一段落となる年であります。その年に図書館が主催する開庫100周年シンポジウムを図書館長として開催することに深い感慨を

覚えます。このシンポジウムがきっかけとなり、先ほどから「文化を大切にする」とおっしゃっているということですので、多くの方々に寺内文庫のことを知っていただき、寺内文庫がますます発展していくことを祈念いたしまして、桜圃寺内文庫開庫100周年記念シンポジウムを終了させていただきます。

なお現在図書館で、「寺内正毅と桜圃寺内文庫設立100周年を迎えて」を開催しております。お時間のある方はご案内いたしますので、皆様方の左手にお集まりいただきたく存じます。予稿集のない方は出口のところでお渡しいたしますので名乗り出ていただければと思います。本日はどうもありがとうございました。以上で終わらせていただきます。

注

- 1) 当該マイクロフィルム及びA3のコピーは、シンポジウムの翌日の11月4日に見つかり、現在、図書館内の桜圃寺内文庫に保管されている。

写真1 『山口女子短期大学卒業アルバム』より

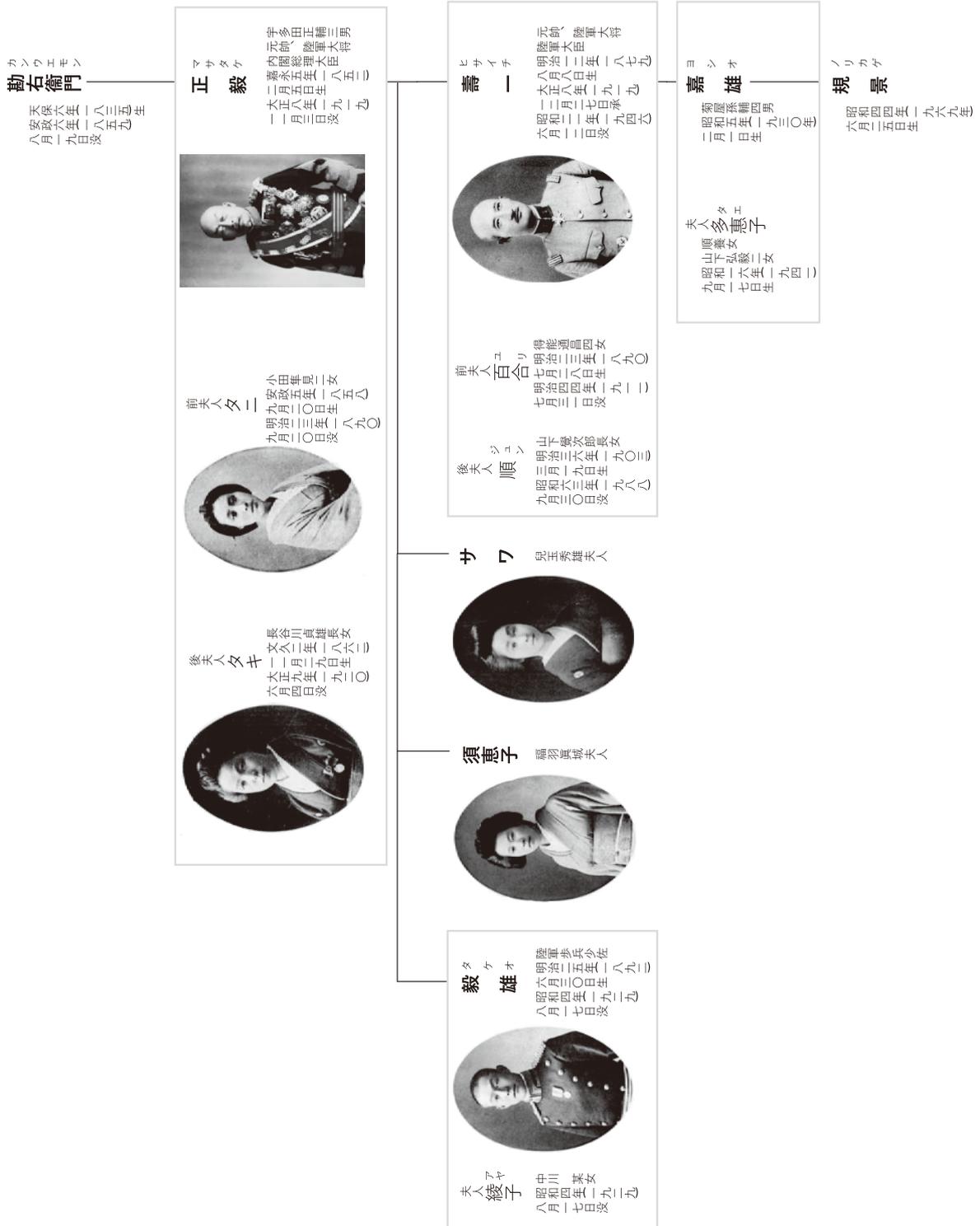
写真2 『山口女子短期大学卒業アルバム』より

写真3 山口市広報広聴課所蔵

パネルディスカッション資料

寺内家 家系図

参考：霞会館華族家系大成編輯委員会編『平成新修旧華族家系大成下』（霞会館、1996年）



(長岡尚哉ほか作成)

パネルディスカッション資料

関連年表

| 和暦 | 西暦 | 寺内正毅・桜園寺内文庫関連 | 山口県立大学の変遷 |
|------|------|--|---|
| 嘉永5 | 1852 | 閏2月 宇多田正輔（父）・竹（母）の間に出生（吉敷郡平井村） | |
| 安政6 | 1859 | 12月 寺内寛右衛門の嗣養子となり家督相続（吉敷郡宮野村） | |
| 明治7 | 1874 | 6月 陸軍戸山学校を卒業 | |
| 明治10 | 1877 | 3月 田原坂の戦（西南戦争）で戦傷 | |
| 明治12 | 1879 | 8月 寺内寿一（長男）出生 | |
| 明治15 | 1882 | 9月 フランス留学（～1886年1月帰国） | |
| 明治20 | 1887 | 11月 陸軍士官学校校長 | |
| 明治33 | 1900 | 11月 鉄道会議議長（1913年2月まで断続的に在任） | |
| 明治35 | 1902 | 3月 陸軍大臣（～1911年8月） | |
| 明治39 | 1906 | 7月 南満州鉄道株式会社設立委員長 11月 陸軍大将 | |
| 明治40 | 1907 | 9月 子爵を授爵 | |
| 明治43 | 1910 | 5月 韓国統監を兼任 10月 朝鮮総督を兼任 | |
| 明治44 | 1911 | 4月 伯爵を授爵 | |
| 大正5 | 1916 | 6月 陸軍元帥 10月 内閣総理大臣（～1918年9月） | |
| 大正8 | 1919 | 11月 糖尿病に起因する多臓器不全で死去 12月 寺内寿一（長男）伯爵を襲爵 | |
| 大正11 | 1922 | 2月 桜園寺内文庫の開庫 | |
| 昭和16 | 1941 | | 2月 山口県立女子専門学校(家事科・国文予科)設置認可 |
| 昭和18 | 1943 | 6月 寺内寿一（長男）任陸軍元帥 | 9月 家事科第1回卒業式挙行。同窓会桜園会創立 |
| 昭和19 | 1944 | | 4月 国語科・育児科・保健科・被服科設置 |
| 昭和20 | 1945 | | 3月 予科廃止 |
| 昭和21 | 1946 | 6月 寺内寿一（長男）マレーシアのイギリス軍刑務所で病死 | 3月 家事科・裁縫科廃止 |
| 昭和22 | 1947 | | 1月 桜園寺内文庫を借用し女専附属図書館に充当 10月 保健科を生活科と改称 |
| 昭和25 | 1950 | | 4月 山口女子短期大学(国文科・家政科(食物専攻, 被服専攻, 児童専攻))設置認可 5月 開学式 |
| 昭和26 | 1951 | | 3月 山口県立女子専門学校廃止 |
| 昭和32 | 1957 | 寺内家と山口県とで桜園寺内文庫の売買契約を締結 建物と蔵書を山口女子短期大学に移管 | 1月22日 桜園寺内文庫を購入し短大付属図書館として設置 3月 保育科増設認可 |
| 昭和33 | 1958 | | 3月 家政科児童専攻廃止 |
| 昭和36 | 1961 | 5月 蔵書の一部を山口県立山口図書館に寄贈・寄託(平成20年に寄贈に切り替え) | |
| 昭和39 | 1964 | 寺内家から国立国会図書館県政資料室へ正毅関係文書を寄贈 | |
| 昭和41 | 1966 | 寺内家から防長尚武館へ正毅・寿一の勲章・勅書・勲記・記録・服装などを寄贈 | |
| 昭和50 | 1975 | | 1月 山口女子大学(文学部(国文学科, 児童文化学科)・家政学部(食物栄養学科, 被服学科))設置認可 4月 山口女子大学開学 5月26日 山口女子大学開学式挙行 |
| 昭和51 | 1976 | 3月 『桜園寺内文庫の研究』刊行 | 2月 食物栄養学科専攻分離(食物栄養専攻, 管理栄養士専攻)認可 3月 山口女子短期大学廃校 |
| 昭和53 | 1978 | | 3月20日 附属図書館竣工 6月19日 附属図書館開館 寺内文庫の蔵書は図書館2階寺内文庫保存室へ移動 |
| 昭和61 | 1986 | | 4月 郷土文学資料センター設置 |
| 昭和62 | 1987 | 寺内家から防長尚武館へ数点の遺品を寄贈 | |
| 平成3 | 1991 | | 4月 家政学部改組。食生活科学科・栄養学科・生活デザイン学科設置 |
| 平成5 | 1993 | | 3月 家政学部食物栄養学科・被服学科廃止 |

パネルディスカッション資料

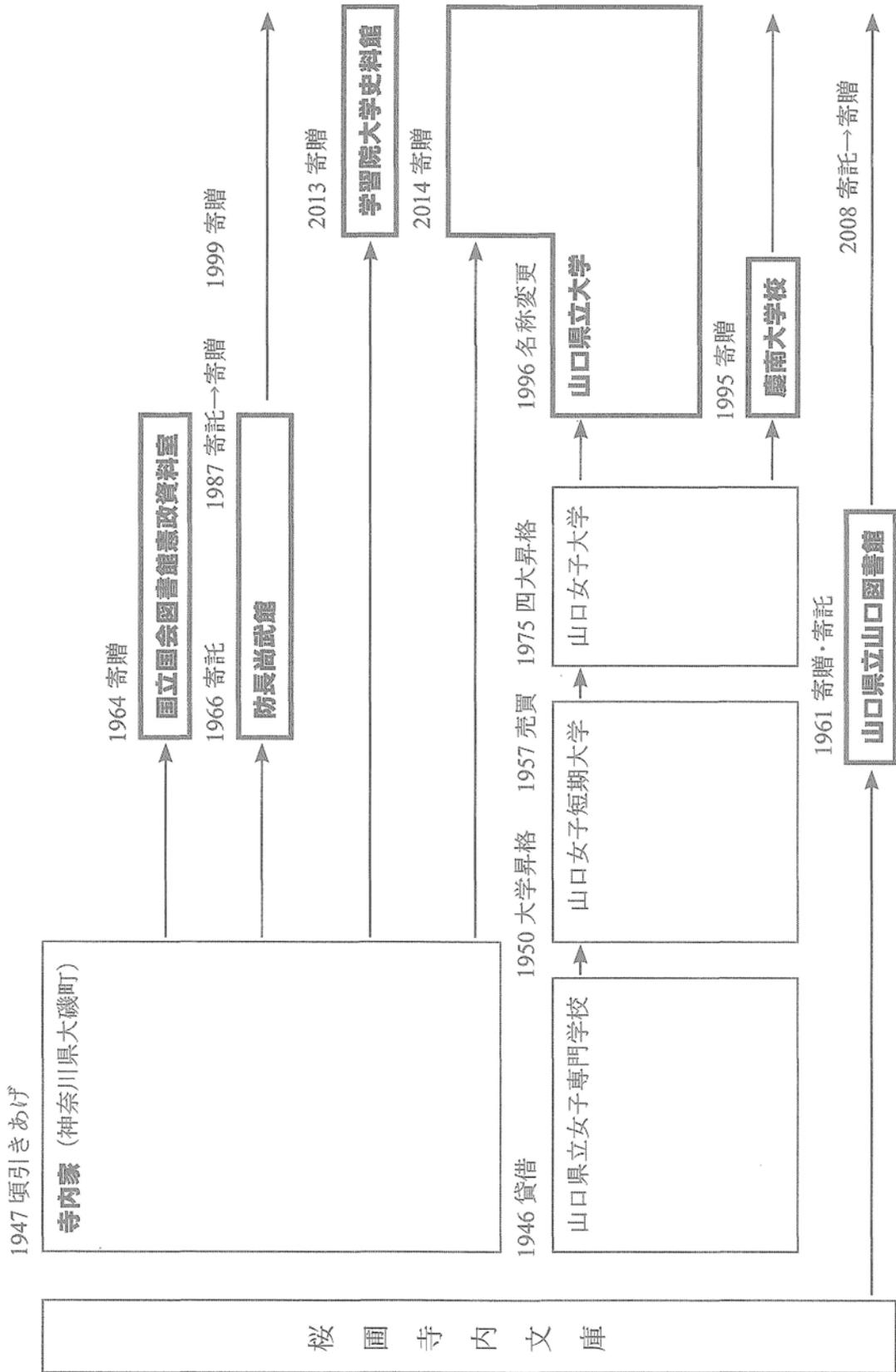
| 和暦 | 西暦 | 寺内正毅・桜園寺内文庫関連 | 山口県立大学の変遷 |
|------|------|--|--|
| 平成6 | 1994 | | 4月 文学部改組。国際文化学部(国際文化学科)・社会福祉学部(社会福祉学科)設置 |
| 平成7 | 1995 | 11月11日 山口女子大学附属図書館所蔵の寺内文庫の資料の一部を、大韓民国の慶南大学校へ寄贈。同日、朝鮮関係文献寄贈覚書調印式が開催された | 4月 看護学部設置認可 |
| 平成8 | 1996 | 山口女子大学の名称変更に伴い、文庫資料の保管先も山口県立大学附属図書館へと名称変更 | 4月 山口女子大学を山口県立大学に名称変更(男女共学化) 4月 看護学部(看護学科)設置 |
| 平成10 | 1998 | | 4月 家政学部(食生活科学科, 栄養学科, 生活デザイン学科)を生活科学部(生活環境学科, 栄養学科, 環境デザイン学科)に名称変更 |
| 平成11 | 1999 | | 4月 山口県立大学大学院(国際文化学研究科国際文化学専攻, 健康福祉学研究科健康福祉学専攻・生活健康科学専攻)設置 |
| 平成18 | 2006 | | 4月 公立大学法人山口県立大学発足 4月 健康福祉学研究科健康福祉学専攻(博士後期課程)設置 |
| 平成19 | 2007 | | 4月 国際文化学部・生活科学部・看護学部改組。国際文化学部(国際文化学科, 文化創造学科)・社会福祉学部(社会福祉学科)・看護栄養学部(看護学科, 栄養学科)の3学部体制に |
| 平成24 | 2012 | | 4月 別科助産専攻設置 |
| 平成25 | 2013 | 6月 寺内家から学習院大学へ正毅・寿一関係資料の一部を寄贈 | |
| 平成26 | 2014 | 1月28日 寄贈調印式挙行(遺族から山口県立大学へ資料寄贈) 山口県立美術館にて、特別展「宮野の宰相・寺内正毅とその時代—桜園寺内文庫への新規寄贈資料展」開催(1/29～2/2)。 山口県立山口図書館にて、シンポジウム「桜園寺内文庫の可能性—新出資料が語る近代日本」開催(2/1) | |
| 令和元 | 2019 | 10月27日 山口県立大学にて、「寺内正毅没後100年記念・十朋亭維新館開館1周年記念講演会『寺内正毅と近代日本』」開催 | |
| 令和3 | 2021 | 11月3日 山口県立大学にて、「桜園寺内文庫開庫100周年記念シンポジウム—桜園寺内文庫と山口県立大学—」開催 | 4月1日 新図書館開館(北キャンパス) |

出典

1. 伊藤幸司ほか編『寺内正毅と帝国日本—桜園寺内文庫が語る新たな歴史像』勉誠出版, 2015。
2. 伊藤幸司編『寺内正毅ゆかりの図書館桜園寺内文庫の研究—文庫解題・資料目録・朝鮮古文書解題—』勉誠出版, 2013。
3. 山口県立大学創立75周年記念誌発行準備委員会編『山口県立大学75周年記念誌』山口県立大学創立75周年記念誌発行準備委員会, 2016。

パネルディスカッション資料

【桜圃寺内文庫旧蔵資料の所蔵先】



伊藤 幸司 編 『防長尚武館の寺内正毅・寿一関係資料』
 (山口県立大学、二〇一六年) から転載